

# 混成第九旅団の日清戦争（1）

——新出史料の「従軍日誌」に基づいて——

原 田 敬 一

## 〔抄 録〕

本稿は、新出の史料である「従軍日記」一編を使用して、「日清戦争」に従軍者がどのように描いているか、を追究する。この「従軍日記」の著者は、混成第九旅団野戦砲兵第五聯隊第三大隊第五中隊に属する将校であり、一八九四年六月六日から翌年二月一日まで日記を書き続けた。戦後の清書や刊行物ではなく、現場で書いていた日記と推測され、日本が日清戦争開戦前に朝鮮に派兵した最初の部隊の一員であった。参謀本部が編纂し、刊行し

た『日清戦史』全八巻には、いくつかの遺漏や改ざんの跡が指摘されており、そうした点も、「従軍日記」という軍人自身の記述により再検討することができる。

**キーワード** 日清戦争、従軍日記、混成第九旅団、砲兵、

将校

## はじめに

近代日本は大陸での権益維持のためにしだいに戦争への危機意識を弱め、逆に大きな戦争を進めることにより、「国難」を回避できる、と考えていく。欧米列強の「迫害」による危機意識から、自ら戦争を遂行することへの危機意識がなくなり、ついには対英米戦争という最大の戦争に突入することになった。これは第一次世界大戦後欧米諸国

が持つ、戦争を回避したい、という弱い平和意識を鑑みなかった近代日本の「不幸な道」でもあった。最初のボタンの掛け違いが日清戦争である。

日清戦争は、政治外交史での中塚明『日清戦争の研究』（青木書店、一九六八年）や藤村道生『日清戦争―東アジア近代史の転換点―』（岩波新書、一九七三年）という名著の後、高橋秀直『日清戦争への道』（創元社、一九九五年）、斎藤聖二『日清戦争の軍事戦略』（芙蓉

書房出版、二〇〇三年）、檜山幸夫『日清戦争―秘蔵写真が明かす真実―』（講談社、一九九七年）、大谷正『兵士と軍夫の日清戦争』（有志舎、二〇〇六年）など、この一〇年で急速に解明が進んだと言える。

私も二〇〇八年に『日清戦争』（吉川弘文館）をシリーズ「戦争の日本史」の一冊として上梓し、日清戦争全体を軍事的に俯瞰した。紙数の点から同書で果たせなかったことの一つは、確認されている日清戦争「従軍日記」三六点（新井勝紘「従軍日記に見る兵士像と戦争の記憶」の表1、藤井忠俊・新井勝紘編『人類にとって戦いとは』第3巻戦いと民衆、東洋書林、二〇〇〇年所収。同表から重複一点を除く）を駆使して書くことである。軍夫の従軍日記を使った好著としては一ノ瀬俊也『旅順と南京―日中五十年戦争の起源―』（文春新書、二〇〇七年）があり、岡部牧夫「一兵士の見た日清戦争―窪田忠蔵の従軍日記―」（『創文』第二二四―二二八号、一九七三―七四年）という先駆的研究もある。本稿はある「従軍日記」を使い、参謀本部編・刊の『日清戦史』と、福島県立図書館蔵の「日清戦史」草案を含めて、日清戦争の断面を描く。「日清戦史」草案は、参謀本部が編纂した公刊本の草案であり、公刊書と大きく異なっている。それらも再検討できる。

この新出史料は「従軍日誌」と表書きされている、和綴じ一二一頁（約六〇丁）というものである。縦一五・五センチ、横二一・五センチ、厚さ一・六センチという小振りな体裁だが、一八九四年六月六日から始まり、翌九五年二月一四日まで続けていて、日清戦争の期間を相当カバーできる。著者の氏名はないが、第五師団混成第九旅団野戦砲兵第五聯隊

第三大隊第五中隊の将校である。つまり、六月最初に出兵した部隊の一員であり、将校として大隊長や参謀長など幹部将校に接して、発言や動向などを記しており、兵士の従軍日記とは異なった意味がある。従軍日記は、従軍中のメモに基づいて、帰国後に清書しているものが多く、戦後の情報が混在している可能性を否定しきれないが、この「従軍日誌」は、書いている文字や筆調が異なるので、従軍中に書き進められたのではないかと推測している。

第五師団の日清戦争従軍日記は一点ある。地主愛子編・浜本利三郎『日清戦争従軍秘録―八〇年目に公開するその因果関係―』（青春出版社、一九七二年）である。浜本利三郎は歩兵第二聯隊の下士官だが、第二次輸送計画で侵攻していった部隊であり、本史料のように六月初め出兵部隊（第一次輸送部隊）ではない。その点でも貴重な史料と言える。本稿では「従軍日誌」本文について、日を追って全文翻刻し、注記する形で分析を示す。

一 動員から出兵へ―六月六日から十六日まで―

伊藤博文内閣は、一八九四年六月二日、山県有朋樞密院議長も参加させて閣議を開き、帝国議会の解散と朝鮮への出兵を決議する。すぐさま参謀総長有栖川宮熾仁親王と参謀次長川上操六が席上に呼び出され、混成一箇旅団の派兵計画が決定される。距離的な便宜から、広島に師団司令部を置く第五師団の第九旅団（歩兵第一一聯隊と歩兵第二一聯隊を基幹とする）を抽出して編制することになった。伊藤首相が参内して、帝国議会の解散と朝鮮への派兵を上奏し、天皇の裁可を受

ける。

翌三日寺内正毅参謀本部第一局長は、「混成一旅団ノ編制表」を参謀総長に提出した。編制表とともに提出された運輸計画には、混成第九旅団に続いて、本隊の第五師団残部も動員することが含まれており、参謀本部では小出兵で収める計画ではなかったことが明らかである。同日午後九時五五分新橋発広島行きの列車には、参謀本部第一局員東条英教少佐が乗り込み、第五師団司令部に渡す動員計画や戦闘序列などを記した重要書類をしっかりと持っていた。師団規模の動員下令を一週間程度で終わらせるためには、事務的処理に熟練し、切り盛りすることが必要で、そのための派遣だった。

輸送についても着々と手が打たれた。四日川上操六参謀次長は、日本郵船会社に対し、社船一〇隻の備船契約締結と、それらを一週間以内に広島県宇品港へ回航するよう指示した。関西の大手船会社であった大阪商船会社にも二隻の借り上げを命令し、釜山・仁川間の通信船として使用した。大陸への派兵には運送船が必要だが、この頃の日本には一四七隻、合計一二万三二七九トンの近代的商船群があり、欧米船を雇用せずに大軍の出兵は可能だった。自国の運送船で日本海を渡り出兵する能力を持っていた軍隊は、アジアでは日本にしかない。ロシアも清国も（ロシアの極東陸軍はまだ存在していないが）、軍隊の運送手段がなかった。清国の民間ジャンク船では、歩兵は運べても砲兵などの近代的武器は運べない。参謀本部による作戦計画は、清国海軍が制海権を握る可能性は想定したが、清国陸軍の日本上陸を考えていなかったのは、主に運送船不足の知識による。軍事能力は、最前線

の戦闘能力だけでなく、運送力や補給力を含めて総合的に考察しなければならぬ。

六月五日大島圭介駐朝公使は、海軍陸戦隊七〇名と巡查二一名を伴って、巡洋艦八重山（一八九〇年に横須賀海軍工廠で竣工した新鋭船、一五八四ト、一二センチ砲三門）に乗り込み仁川に向かった。三日の夜新橋を出発した東条少佐も、この日昼頃ようやく広島に着き、野津道貫第五師団長に大本営命令を直接伝えた。協議の後、午後四時野津師団長は、大島義昌第九旅団長に、充員召集を下令する。徴兵制では、師団各部隊には、職業軍人である将校と下士官、教育中の現役兵しかおらず、戦闘態勢をつくるには、平時定員を遙かに上回る戦時定員に達するまで「充員召集」を行わなければならないのである。「従軍日誌」は、翌六日の記述から始まっている（句読点を適宜補い、改行は／で示した）。

明治廿七年六月六日 晴天、起床六時三十分

此日午後五時四十五分命令喇叭ヲ吹奏シタリ、其命令左ノ如シ。

第二大隊ハ動員下令アリシニ付一般休暇外出ヲ差止ム、明治廿七年六月六日午後五時四十分着ト

右命令アリシ後ハ既ニ外出シアル兵卒ニ迄普及セシハ僅カニ二時間余ナリ／聯隊各将校ハ此電報ニ接シ直チニ集営後命ヲ待つ者ノ如シ、第三大隊ノ両中隊ハ其準備へ着手ス／軍医ハ戦役ニ堪ユル者ト堪ヘザルモノヲ区別シ其手続ヲナス

六月六日は水曜日だったが、所用で外出している兵士たちにも直ちに動員下令が伝えられている。それが「二時間余」という速いスピード

であつたことをわざわざ記録しているところに、対外戦争のための充員召集という初めての経験に興奮している将校の姿が見える。

六月七日 晴天、午前四時起床

中隊ハ被服ヲ倉庫ニ納メ第一種衣袴（即新絨衣）ヲ分配シ砲兵刀之着剣ヲ始メラル（但シ砲兵工廠広島支署ニ於テ）

充員召集をかけ、将校や下士官は戦闘態勢の軍装整備にも着手しなければならなかつた。

六月八日 降雨、午前五時起床

此日ノ命令左ノ如シ

現役下士卒満期全限ヲ延ス 陸軍大臣発電

第三大隊ノ動員計画ハ来ル九日迄ニ整備シ了ル可シ、第一次輸送諸隊ハ来ル十日十一日ノ間ニ字品港ニ着スル輸送船ニ乗載シ仁川ニ向テ出発セシム可シ

但シ軍艦吉野ヲ以テ護衛セシム 参謀長 有栖川熾仁親王

此日午後三時聯隊長ハ動員計画武装検査ヲ行フ、予備輜重輸卒六十八名入隊ス

此日下士卒満期々限ヲ延スノ報ニ接シ各兵士ハ始メテ其意ナラザルヲ知り千差万別ノ評ヲ下スト雖モ未タ其実戦遠ク派遣セラル、トハ素ヨリ知ル者ナク亦規律厳ニシテ柵ハ空天ニ貫カントスル高柵ノ内ニ別世界ヲ織組シ居ル吾人軍人何ソ之レヲ知ルニ由アラシ、或將校ノ曰ク大日本帝国ノ隣国タル朝鮮國王ヨリ救兵ヲ乞ヒシヲ以テ彼ノ国ニ至リ東学堂ヲ征ス可キ内命アリシナト云フト雖モ未タ信ヲ置クニ足ル可キ説ナシ

後一時兼而送りタル砲兵刀砲兵工廠広島支署ヨリ帰送ス、依テ直チニ各人ニ分配ナル／此日軍医長ヨリノ訓示ス、大略左ノ如シ。  
釜山及京城ノ暑氣ハ我東京ニ比スレハ頗ル高度ナリ／朝鮮ノ一里ハ我三十五間二尺四寸ニシテ彼ノ十里ハ略ホ吾一里ニ相当ス／此地ノ風土病ハ熱病及ヒ天然痘ナリ

八日にはこの年一月三〇日に満期除隊となるべき下士官や兵士の服役期限が延長される、と発表される。まだ作戦命令は教えられておらず、兵士たちは「千差万別ノ評」を下しつつも、海外出兵ということに氣づいていなかった。當外居住を主とする将校には、朝鮮からの出兵要請があつたと新聞情報を語る者もいた。軍医長が衛生注意を伝え、しだいに朝鮮への出兵が現実感を帯びたものになっていく。この年の朝鮮半島は猛暑であつた。

六月九日 晴天、午前五時起床

午後五時輸送船近江丸着港ヲ報ス、全時命令左ノ如シ。

第三大隊ハ明日出発、輸送船近江丸ニ乗シ第六中隊ハ第二次輸送船ニ乗ス。

第五中隊ノ内幾部分ハ即刻ヨリ字品港ニ至リ本船ニ乗ス可シ、依而第五中隊ハ不時呼集ヲ以テ第二段列ハ直ニ字品港ニ至リ乗船ス。九日、いよいよ近江丸への乗船が命じられた。歩兵第九旅団に組み入れられて「混成第九旅団」となつたのは、野戦砲兵第五聯隊の第三大隊本部と第五中隊（筆者の部隊である。野砲六門）、工兵第五大隊の第一中隊、騎兵第五大隊、第一野戦病院（師団に属すもの）、輜重隊半部、兵站監部・司令部一箇の付加による（合計約八〇〇〇名）。

六月一〇日 雨、午前三時起床

午前四時三十分屯營ヲ出發シテ全シク六時宇品港ニ着ス、其時棲ミ訓（引用者注…馴カ）レ居リタル屯營ヲ行進喇叭ノ声ト共ニ出テ西鍊兵場ヲ横斷シテ堂々整々道ヲ大手町ニ來ル、喇叭ノ清音ハ玲々トシテ空天ニ轟キ為メニ天地ヲ振動セシム、此時余輩ヲ導ク者モ道々ノ者モ□モ各勇奮フテ各功ヲ競ハントスル者ノ如シ、既ニ大手町一丁目ニ至ルヤ市民起床シ決然トシテ余等ノ出師ヲ望見ス、其情余輩若年ナル輩ヲシテ敵地ノ土ト化セシムルヲ思ヒ子ヲ携フル者弟アル者余等ノ為メ涙ヲ流サ、ルナラン。

午前十時近江丸ニ乗ス、人員合計三百六十六人ナリ、馬ハ常ノ乗船演習ニ熟練シ居ラザルヲ以テ乗船殆ント困難ス。／近江丸ハ四層ノ鐵張りニシテ第一層器械室第二層ハ兵卒室第三ハ下士及將校ノ室ニシテ其上ハ即チ甲板ニシテ砲廠ヲ設ケアリタリ、馬匹モ亦此ニアリ。／午後六時三十分宇品ヲ拔錨シ呉港ニ至リ飲用水一百噸ヲ積ム、此時兵士ハ船夫ト力ヲ合セ乗水ヲ助力ヲナス／此日風雨稍起ル、午後七時各兵ニ酒一合ヲ分配ス。

午前四時半に駐屯地を出発し、広島市内を宇品港へと進んだ。早朝だったが市民の見送りがあり、行進している軍隊も見送る市民も、「戦争」を実感させる興奮状態が見られる。若手将校の著者も、連日早朝から起きて準備を進め、睡眠時間も少なかっただろうが、六月六日の充員召集下令から五日目のこの日、いわば勇躍して近江丸に乗り込んだようである。アジア太平洋戦争においても軍隊の輸送で困難であったのは馬の乗船だった。クレーンでの持ち上げや経験外のことでは

興奮し、おとなしく乗船することはなかった。午前一〇時から始まった乗船作業がようやく終わり、宇品港を出たのは午後六時半だった。

六月十一日 午前曇、午後晴

午前五時呉港ヲ拔錨シテ宇品港ニ至リ其間約一時間我旅団長及隨行ノ者三名海軍將校二名及信号手三名乗セ全六時十分宇品ヲ發シテ全六時四十分宮島ノ沖ヲ通過ス。

午後四時三十七分馬関港ニ着ス、酒及石炭石ヲ積ム、全五時全港ヲ發ス、此時我國港ノ見終リナルヲ思ヒ戰場ニ望ムノ義志素ヨリ故ノ恋々タルニアラズト雖モ百感千出<sup>マ</sup>呼<sup>マ</sup>鳴。

全五時廿五分安岡ニ着ス、時ニ第一次輸送船中幾分ハ此処ニ集合セリ、之ニ昨夜我船ノ呉港ニ至リシ内ニ其レ々当地ヲ指シテ集リシモノ。／時ニ軍艦吉野ハ既ニ茲ニアリテ信号ニ曰ク全行ス可キ兵庫丸未タ着セザルモ今ヨリ行進ヲ起シ我ニ隨行ス可シト、依テ五時四十分拔錨。／午後六時十分 連島ノ北方ヲ進ム、我先登ハ吉野艦ニシテ輸送船中我近江丸ハ先登ニ至リ之レニ次クハ山城酒田遠江越後熊本千代住ノ江和可ノ浦等ニシテ縦隊トナリテ進ム。／全六時三十分各人へ酒二合ツ、分配／全七時四十分角台秀明台ノ光明明ハル。／當時音モ名高キ玄海ニシテ鳥モ通ハズ只スラ大浪ノ織ルカ如キノミ。

広島市内の行進で市民の見送りに興奮していた著者も、いよいよ日本の港の見納めだと思つと、「百感千出」の思いで思わず「嗚呼」とため息が出た。正直な若い著者と思われる。

六月十二日 晴天



午前四時左方へ壱岐ヲ見ル、全七時対馬ヲ右ニ見ル、全十時頃ヨリ風益強シ怒濤交々来リ行進ニ困ム／本日ヨリ船酔ヲ催フスルモノ多ク然レトモ余ハ幸ニシテ其感ナシ、併シ海上行進スルニ從テ愈故山ヲ離ル亦遠シ、郷里ヲ想ヒ父兄ヲ慕ウ念屢起リテ胸間ニ満ツ、然レトモ余等全士相約シ奮テ敵国ニ効ヲ奏シ名誉ヲ誓フテ帰營センコトヲ期ス。

瀬戸内海を出ると、風浪の強い日本海で船酔いになる者が続出する。航海は数日に亘った。

六月十三日 晴天

午前六時一雲黒煙ヲ吹キテ来ル、汽船アルヲ認ム、未タ其船ノ何タルヲ不知／暫時ニシテ軍艦吉野ノ信号ニ曰ク遠ク我船ニ向テ来ル汽船ハ兵庫丸ニシテ我縦隊ニ入ランガ為メナリ／午後六時酒一合ツ、分配セラル／夕食ノ頃海上一面ニ大霧起リ為メニ咫尺弁セズ、各船其序列ヲ失ス。

遅れていた兵庫丸が、ようやく追いついてきて船隊に加わるが、夜に入り、まもなく大霧が発生し、輸送船隊は混乱して、進行スピードは制限された。

六月十四日 雨天

軍艦吉野ハ頻リニ笛声亦ハ号砲ヲ発シテ其所在ヲ知ラス／此日ト昨夜以来ハ各船其行進危険ナルヲ以テ盛シニ笛声亦ハ鐘ヲ鳴ラシテ苦心所在ヲ相通シ或ハ火ヲ点シ或ハ之ヲ消シ其速度最モ緩慢ナリ／午前二時ヨリ行進ヲ留メ亦四時十分ヨリ行進ヲ起ス。／午前十時頃突然行進ヲ留ム、驚キ右ヲ見レハ島嶼或ハ岩礁巖岬ト

シテ並立セリ、其時漸ク霧少シ晴ル、ヲ以テ之ヲ知ルヲ得タリ、今一步ヲ進メハ余等将来成ス有ルノ大業ヲ負担セシ身ヲ空シク魚服ニ葬ルノ惨界危難ニ陥ル可キ、幸ニシテ虎口ヲ逃レ九死ニ一生ヲ得タルモ長大息各兵士顔色生草タリ、船長ハ直チニ挽回シテ安全ナル処へ至リ休憩スルコト三時間亦行進ヲ起ス、此時我船ハ「ショパーオール」島附近ナルヲ知ルヲ得タリ／午後二時仁川港ヲ去ル海里廿里余ノ処へ達シ小島ノ影ヘヨリテ行進ヲ止メタリ、時ニ風強シ、船体動揺甚シク甲板上歩行スルニ物ニ寄ラズンバ転倒歩ス可カラズ。／時ニ吉野艦ノ号砲ハ我船ノ後方約一里ノ処ニ於テスルヲ聞ク。

午後三時ニテ汽船ト共ニ吉野艦モ亦共ニ茲ニ来ルト雖モ其何船ナルヲ知ズ。／全四時霧少シク晴ル、時ニ吉野ノ信号ニ曰ク来リ会スルモノ越後住ノ江及近江ナルカト報ス、又午後八時信号シテ曰ク仁川ニ向ケ各船行進ヲ起シ安全ナル処ニ於テ碇泊ヲナセ、蓋シ前夜来風雨甚シク到底現在ノ位置ニ有ルコト能ザルヲ以テナリ／時ニ山城丸モ亦来リ会セシガ覆盆傾ノ大雨来リ、波浪甚シク烈風ノ為メニ見ル内ニ錨一箇ヲ切断セラレタリ、今時ニ転覆セントセルコト数回ナリシモ熟練船長ハ瞬モナサズ進船ニ注意ヲ加ヘ夕食ノ如キ船橋ニ立チナカラ麵麴ト珈琲ヲ喫セシニ不過其劳苦亦察ス可シ。

大霧による衝突を避けるため、号砲や笛、鐘を使って、お互いの所在を明確にして、緩やかな速度で進んでいた。しばしば停船し、島や岩との衝突を回避する。朝鮮半島の沿岸沿いに進むため、熟練の船

長らにより難を避けているが、兵士たちは船酔いと衝突の恐怖で「顔色生草」の様相だった。巡洋艦吉野を先頭に、近江丸などが続いていた。六月一四日午後二時には、仁川南方二〇海里（約三七キ）の地点まで進出したが、吉野の号砲は近江丸の後方四<sub>キ</sub>から聞こえ、僚船の越後丸や住ノ江丸なども離れて、船団は混乱状態を続ける。風雨も激しくなり、波浪で転覆の危険性も増していった。

六月十五日 霧且ツ 降ル

午前六時三十分全速力ヲ以テ仁川ニ向テ行進ス、午前十一時五十分着助ケ尾島ノ東岸ニ至ル、時ニ我赤城艦ハ信号シテ曰ク我ニ近く進メト、於是其傍ラニ至ル、京城仁川無事霧晴ルレハ我ハ出発スト／時ニ我ト共ニ入港セシハ住ノ江丸ト吉野艦ノミナリシガ漸次入港ス、各艦ハ吉野ニ対シ祝砲ヲ発ス／本港ニ碇泊シ在ル軍艦左ノ如シ。

八重山、筑紫、高雄、松島、大和、赤城、吉野ノ諸艦ナリ。／外国軍艦ハ清国四、英国一、仏蘭西一、魯一、米国一ナリ。時ニ八重山ヨリ信号スルニ便宜投錨セヨ、陸兵ハ上陸セシメス。

昨十四日以来我船長ノ測定セシ「バロンメートル」ハ左ノ如シ。／十四日午前八時「バロンメートル」二十九、七八今朝七時三十分ニハ三十九、四八ニ下降、之レニ依リテ考フルモ強風烈気ナルヲ知ル可シ。／本船ノ甲板上ヨリ仁川港市街ヲ望メハ一面盛ンナル市街ト察セラル、黒灯ハ戸々ニ起リ鍊瓦作りノ家ニ至モ亦少カラズシテ其望見最モ佳ナリシ。

六月一五日の朝に霧が薄らぎ、船団は全速力で進んで、近江丸は午前

一時五〇分仁川港に到着。六月一日午前六時一〇分宇品港を最終的に出発してからほぼ四日間の航行だった。大霧のため船団の進行は別れ別れになり、吉野、近江丸、住ノ江丸だけがまず到着し、次いで他の輸送船も着き始めた。一日に巡洋艦吉野に守られて仁川に入港したのは、近江丸、兵庫丸、仙台丸、住ノ江丸、山城丸、酒田丸の六隻。翌一六日巡洋艦千代田に護衛されて熊本丸、越後丸、遠江丸の三隻が入港した（『日清戦史』第一卷一二三頁）。

開戦前の仁川港には、日本の軍艦七隻、英仏露米の四隻のほか清国軍艦四隻も投錨していた。日本陸軍の輸送船団到着は、軍艦を通じて清国政府に情報として届いただろう。武蔵、赤城、八重山の三艦は、仁川港の警備を続け、その他は「常備艦隊ヲ集結シ所要ノ修理ヲ加ヘ其編制ヲ更メ以テ時局ノ急ニ応セント」（同）して、佐世保港に回航させた。

混成第九旅団には、仁川港に到着はしたが、上陸はさし止める、という八重山艦經由の大本営命令が伝えられた。これは、混成旅団八〇〇名の派兵というのが「居留民保護」という名目からは多すぎ、欧米公使館の疑惑を招く、という大鳥圭介公使の判断により指示となったものである。漢城で欧米の外交官と接触して、日本軍派兵を受けとめる環境作りの大鳥公使は、多数の部隊の派兵という状況を打開しかねていた。一日に仁川港に到着した第一次輸送隊は、「輜重及荷物ヲ除クノ外十六日中ニ悉ク」（同一一頁）仁川港に上陸し、仁川の日本居留地付近に宿営した（同）。上陸したのは人員二六七三名と馬匹一八六頭だった（同）。

漢城には、すでに日本陸軍の先発隊が到着していた。六月六日午後二時五〇分の大本営命令（歩兵一箇大隊の先発）に基づき、第五師団は、歩兵第一聯隊第一大隊（大隊長一戸兵衛少佐）と工兵一箇小隊を抽出、九日午前宇品港出港、一二日仁川に到着していた。五日宇品港を出発、一〇日に漢城に入った大島公使は、農民軍の内乱拡大の可能性は低く、これ以上の部隊派遣は不要と考えた。大本営に対し、一戸大隊以外の「余ノ大隊派遣見合ハサレタシ」との電報を打ち、一戸大隊にも、仁川港にとどまり、漢城への進行を禁止した。一日午後九時二七分に到着した、この大島電報に対し、陸奥外相は、「如何スルトモ能ハズ」と即答した電報をうったが、まだ出発していなかった第二次輸送計画の部隊出発を見合わせることにした。前記した「従軍日誌」にあつたように、先発隊に次ぐ第一次輸送計画の諸部隊は、六月一日午前六時一〇分宇品港を出航していた。「従軍日誌」には、同日午後四時三七分に馬関港（山口県下関港）に入港し、最後の石炭と酒の積み込みを行ったが、これにも大島電報は間に合わなかった。大島公使は、大部隊の派遣を止めるため、「京城目下ノ形勢ニテハ、過多ノ兵士侵入ニ対スル正当ノ理由ナキヲ恐ル」（一二日午前一〇時三〇分着）と打電したが、一三日午前陸奥外相は、今回の出兵が「何事ヲモ為サズ、又ハ何処ヘモ行カスシテ、終ニ同処ヨリ空シク帰国スルニ至ラハ、甚タ不体裁ノミナラス、又政策ノ得タルモノニアラス」と返電し、出兵差し止めに反対だとの意志を強く伝えた。同日午後七時四〇分発の陸奥電報は「朝鮮国ニ対スル将来ノ政策ニ就テハ、日本政府ハ止ムヲ得ス強硬ノ処置ヲ執ルニ至ルコトアルヘシ、本大臣ハ之

ニ付伊藤伯ト商議中ナリ」と加えて、「強硬ノ処置」を伊藤首相と協議中の段階だから、大島部隊の漢城進行・駐屯は必要な手段である、と指示を出している。

これらの電報が大島に受け入れられたのかどうか、は不明だが、同じ一三日に一戸大隊は仁川を出発し、同日午後六時には漢城の日本公使館に到着した。公使と同道していた海軍陸戦隊と交替し、部隊は日本居留地付近に宿営することになった。

第五師団長と師団司令部は、混成第九旅団への六月八日付大本営命令の第二項、

二、混成旅団ハ仁川港若クハ其附近ニ上陸シ首トシテ京城及仁川ニ在ル者ヲ保護スヘシ／旅団中ヨリ歩兵一中隊（一小隊欠）ヲ釜山ニ、歩兵一小隊ヲ元山ニ分遣シ其地ニ在ル者ヲ保護セシムヘシ、但シ此兵ハ第二次輸送ノ内ヨリ派遣スヘシ（『日清戦史』第一巻「附録第十一 混成旅団モ任務ニ関スル命令」）

を拡大解釈し（「命令解釈齟齬ノ結果」同一一頁）、一五日午後三時歩兵第二聯隊第二大隊を搭載した高砂丸が、突然宇品港を出港し、仁川港にむかった。この後、大本営は「改メテ」第五師団長に第二次輸送計画の中止を命じている（同）。

二 第九旅団第一次部隊上陸から七月二三日戦争、清国との開戦まで  
六月一六日第一次輸送計画で運ばれてきた部隊の上陸が始まることになった。しかし仁川駐屯にとどめて、漢城への進行命令は、欧米公使団に配慮して、まだ出されなかった。



六月十六日 曇天 午後晴

午前四時起床四時三十分食時

全六時仏国軍艦ハ清国鎮遠号入港ニ対シ礼砲ヲ発シタリ、各国モ亦相当ノ礼式ヲ行フ。／全七時四十五分英国ノ軍艦一艘ト我国ノ赤城艦ハ入港シ来ル各国之レニ対シ礼砲ヲ発シタリ／午前七時五十分吉野信号シテ曰ク陸兵上陸ヲ始ム可シ／正午支那国軍艦一艘ハ仁川ニ居留シアル全国人ヲ積込ミ帰国ノ途ニ就ク、米国軍艦一艘ハ之レニ対シ軍樂ヲ奏シタリ。／午前八時ヨリ人馬及ヒ材料ノ上陸ニ着手シ全港海岸ニ砲廠ヲ造リ哨兵ヲシテ之レヲ守ラシム、韓人ハ一斑不潔ニシテ一種ノ臭氣アリ、我砲廠ニ接シ亦ハ其間ヲ遮ラントスルヲ禁止スルニ皆畏懼シテ走り、為メニ相衝突スルヲ見ル、亦其小胆ナル一斑ヲ伺フニ足ル。／当仁川ハ新開地ナルモ日本人最モ多ク、支那人之レニ次キ、米仏英人アリ、平時ニ於テモ飲用水乏シク水ヲ売ルモノアリト、特ニ日本ノ大群上陸飲用水ノ欠乏ニ困却ス／上陸全時旅団長ヨリ口達ノ事左ノ如シ。  
支那兵ハ牙山ニ上陸駐在シ居レリ、其兵数二千百余斗ナリ、朝鮮及支那官吏ノ言フ処ニ拠レハ入京セズ、又一方ノ説ニ依レハ既ニ十一日牙山ヲ出発シタリトノコトナリ、然リト雖モ未タ京城ヨリ未タ何等ノ報ナシ。

東学党ノ況景詳ナラズ、朝鮮及支那官吏ノ言フ処ニ依レハ既ニ治リタリト、此操動ハ全ク州ノ司官カ摂政ノ宜キヲ得ザル為メ死一等ヲ減シ流刑ニ処セラル、更ニ現在官吏ヲ派遣セシメタリト、亦一方ノ説ニ依レハ未タ鎮マリタルニ至ラズ、盛力益旺盛トノコト

ナリ、右両説アリシガ只今ノ処ニ依レハ幾分治マリタル方ニ近シ。亦内閣總理大臣ヨリノ達文左ノ如シ。

今般朝鮮国ニ於テ乱民蠢動全ク政府ノ力之レヲ沈圧スル不能ルノ趣確報アルニ依リ各国駐在ノ我公使館領事館及帝国人民保護ノ目的ヲ以テ其旅団ヲ率ヒ全国ヘ派遣セシメラレタリ。

物価表ノ概略左ノ如シ。

白米九円 小豆八円 大豆四円 牛肉百目拾銭 砂糖十二銭 洋服洗濯十五銭 湯銭式銭水一手二銭五厘 梅干一個五厘

上陸した各部隊が、まず困ったのは飲料水だった。これは日記の最後に記し始めたように、買うことどころか乗り切る。ついで尿尿の処理が問題となった。内地の駐屯の場合、農家の肥料として処理していたが、それができず困ったことになった。

六月十七日 雨

全港ニ滞在ノ本夜服食物ハ「メタ」ト称スル海魚ナリシガ元来本品ハ一夜間水中ニ潰シテ後之レヲ煮ル可キ者ナルニ之レヲ塩煮セシ故カ忽チニシテ吐瀉シ腹痛甚シク或ハ下痢等ニテ突然患者甚シ。知らない魚、「メタ」を塩煮して食べたところ、吐瀉、腹痛、下痢などが相次いだ。これも初めての外征がもたらした、予想外の事態だった。

六月十八日 曇午後八時ヨリ降雨

午前八時三十分呼集ニテ仁川港ヲ離ル、二里ヨリノ処長川里ニ向テ行軍、午後一時帰營、其経路中朝鮮町ヲ通過ス、全町ハ固リ全国ノ風習トシテ不潔臭氣憤々トシテ鼻ヲ突ク

本日ヨリ酒保ヲ開カル。

一八日には、部隊の訓練として往復八<sup>キ</sup>ほどの行軍に出かけた。高砂丸がこの日仁川港に到着したが、運んできた歩兵第二聯隊第二大隊は、出発中止の第二次輸送計画の部隊であったため、旅団長は「当分之ヲ上陸セシメサルコトニ決」して、上陸させなかった。

第一次輸送部隊のうち、大島旅団長ら旅団司令部は一八日仁川港から漢城へ入り「大島公使ニ会シ、諸兵ノ入京ニ関シ謀議スル所アリ」（『日清戦史』第一卷一一頁）。この情報は、各部隊には翌一九日に発表されたようで、筆者は一九日の条に記録している。

六月十九日 雨天

前夜風雨ノ為メ厩破壊シ修繕ス／此日旅団長ト共ニ大隊長入京セラル。

二〇日になって、上陸を二日間さし止められていた高砂丸の乗船部隊が、ようやく上陸となったと、この従軍日記の著者は記録したが、『日清戦史』は、異なった記述をしている。

大島混成旅団長ハ二十日仁川港ニ帰り爾後清兵統発ノ情報頗ル確實ト為リタルカ故ニ二十三日ニ至リ曩ニ船中ニ在テ命ヲ待タシメタル歩兵第二十一聯隊ノ第二大隊ニ上陸ヲ命シ我居留地ノ西南部ニ舍營セシメ之ニ工兵一分隊ヲ附シ（同第一卷一一三頁）

と上陸は二三日のことと明記している。二五日には清国の輸送船情報も的確なものが伝わり始めているが（『従軍日記』二五日の条、実は二〇日に大島旅団長の判断で、上陸、すなわち部隊の増援を実現させていた。この「従軍日記」の記録は重要である。第二次輸送計画（輸

送船八隻）のさし止めが、大本営により解除されるのは二三日で、部隊が六連島を出発するのは二五日である（『日清戦史』第一卷一一四頁）。

六月廿日 晴天

午前休業、午後砲廠移転／歩兵第廿一聯隊到着上陸ス。

「従軍日記」は、舍營地等を仁川居留地の東方に移した、と淡々と記すが、これらもいざれ確実になるソウル駐屯への準備であった。一八日にソウル入りした大島旅団長は、先発隊の一戸大隊長から状況を聞き取り、「更ニ命シテ其工兵ヲ龍山附近ニ出シ楊花鎮ニ於ケル渡河ヲ準備セシム」（同一一頁）。事態は開戦へと準備が進められていた。

六月二十一日 晴天

午前砲廠及厩ヲ舍營地ノ東方ニ移転ス／午後休業。

六月二一日は木曜日だったが、連日の訓練などを考慮したのか「午後休業」となった。

六月二十二日 晴天

午後四時二十分清国軍艦四艘整列シテ入港ス／我艦相当ノ礼式ヲ行フ。

二二日には大島艦が仁川港に入港したが、赤城艦が佐世保に回航されたので、仁川港に駐在している日本海軍は三隻しかなかった。そこへ清国軍艦四隻が入港してきて、日本海軍は、軍事的圧力を感じつつも「相当ノ礼式」として礼砲を撃つなどで対応している。

六月二十三日

午前七時三十分ヨリ凱仙里ニ向テ行軍正午帰營里程二里／午後休

業。

土曜日の二三日は行軍訓練も行ったが、「午後休業」とした。木曜、土曜と午後休業となったが、近いうちにより緊張度の高いソウル移駐が命じられるはずだ、という予想のものと休業かも知れない。二四日にはいよいよ移駐が命じられている。『日清戦史』には「大島混成旅団長ハ（中略）二十三日ニ至リ（中略）第一次輸送諸部隊ハ龍山附近ニ転移セシムルニ決シ二十四日諸隊ヲ率テ仁川ヲ発シ同夜万里倉附近ニ幕営セリ」（第一卷一一三頁）と、二三日にソウル移駐を決定し、二四日には仁川を出発した、と記しているが、「従軍日記」二四日の条も、当日深夜一時に起床して、歩兵一箇大隊とともに「麻浦」に向けて出発した、と記録する。「麻浦」は漢江を渡河した北方地点で、先発隊駐屯地の龍山の西約五〇〇<sup>ハ</sup>の場所である。旅団長らの部隊が二四日夜に幕営した「万里倉」は龍山の北約五〇〇<sup>ハ</sup>であり、全部隊を龍山附近に集結させる計画と思われる。「従軍日記」にあるように、最初に出発した歩兵一箇大隊と砲兵隊は二四日午後三時に漢江を渡河して幕営予定地に到着している。「炎暑甚敷」<sup>イ</sup>中約四〇<sup>キ</sup>を行軍した各部隊には日射病患者が続々と出ていた。

六月廿四日 晴天

午前一時起床、直チニ歩兵第十一聯隊第一大隊ト共ニ麻浦ニ向テ前進ス／三回ノ小休止ヲ成シ曉ニ嶮悪ナル大坂ニ達ス、特ニ我居留人民五六名ハ既ニ茲ニ在リテ我軍隊ヲ嚮ヘ皇国軍隊万歳ト呼フ、午前十一時大休止ヲ行フ、約一時間ニシテ行進ヲ起ス／午後三時漢江ヲ経テ四時陵現幕営地ニ達ス／此日炎暑甚敷整々堂々タル我

軍隊ハ兵卒モ飲用水ノ欠乏ヨリ日射病ヲ起シ終ニ路傍ニ倒ル、ニ至リシ者多数アリ（消シ…タルコト）。

本日ノ行程八里ト云フト雖モ實際ハ十里ノ余アリ。

二四日武蔵艦が、牙山湾で、清国の汽船・海定号の輸送兵揚陸を目撃し、仁川港に帰着した二五日に、大本営や在韓公使館に報告をあげた（『日清戦史』第一卷一二四頁）。中国駐在の武官からの輸送船情報も含めて、大本営は清国輸送船撃破の計画を立て始める。

六月廿五日

午前六時昨夕ノ食事補給トシテ結飯一ケツ、分配、全地飲用水不充分ニシテ馬匹水飼ハ露果ト云フ全地ヲ距ツル約二千米突ノ処ニ於テナス。／幕営地ノ南方ニ旅団騎兵工兵隊アリ、背面ヨリ西ニ当リテハ歩兵隊アリ、何レモ幕営。／京城ノ居留民来リ酒保ヲ開キ其物価左ノ如シ。

卵二錢五厘 氷水三錢五厘 手紙三錢 砂糖三十五錢 酒四十錢  
牛肉貳拾五錢 封筒參錢 菓子ハ本国二三倍ス。

第一次輸送計画の諸部隊は、前述のように二四日には龍山附近に舎営、幕営を開始したが、翌二五日になると、ソウルの日本人居留民が駐屯地に入り込んできて、物品販売の店舗である「酒保」を開いている。将兵の買物物の便のため、酒保の開店には厳しくなかったかも知れない。菓子の値段が内地の「三倍」だというのは、現地値段という意味であらう。

六月二十六日 晴天 朝九十二度正午百〇二度

午前六時四十分ヨリ京城ニ向テ行軍ヲナス、崇礼門ヲ入テ大道ヲ

貫キ迂回シテ我公使館へ至ル、時ニ我帝国臣民五六輩ハ軍隊万歳ヲ三称ス、全時清国人ノ在ル者ハ下等社会ノ者ト公使館ニ数十名アルノミナリ、我公使館ハ京城市街ニ一眼ニ見下ス可キ高地ニシテ特ニ支那公使館ハ僅カ五百米突ニ不過、王城所在地ハ千米突以上。／飲用水ハ公使館背後ノ山溪ヨリ流出シ其質尤モ良シ、其山腹ニ於テ砲列ヲ數キ昼食ヲナス、午後四時帰營ス。／此日炎暑甚數全身出汗アツ如シ。

一八九四年の東アジアは暑かった。温度を華氏で示しているが、九二度は摂氏三三・三度、正午の一〇二度は摂氏三八・九度である。相当暑かった。金沢から敦賀まで行軍した歩兵第七聯隊で日射病患者が続出し、将校一人が亡くなっている（拙稿「軍隊と日清戦争の風景―文学と歴史学の接点―」『鷹陵史学』一九号、一九九四年三月）。朝早くから行軍しても、帰營が午後四時では、体から出る汗は「瀧ノ如シ」であつた。

六月廿七日 晴天

当隊ハ当分当地ニ滞在ノ積リニテ仮厩設置。

諸部隊が行軍などの訓練に明け暮れるのは、清国軍との戦争開始の大義名分が見つからなかったためである。砲兵隊の大砲を挽く轡馬を囲つておく厩の位置も「仮」とされた。二七日夕方、第二次輸送部隊の輸送船八隻が、巡洋艦浪速の護衛で仁川港に到着したが、『從軍日記』には記載がない。夕方から夜にかけてで、連絡が充分ではなかったかも知れない。「諸部隊ハ夜暗干潮等ノ為メ其行動ヲ妨ケラレ二十八日夕ニ至リ上陸ヲ畢リ」（『日清戦史』第一卷一一五頁）という記述から

も、仁川港上陸は二八日の夕方だと思われる。「從軍日記」の著者は、すでにソウル郊外の龍山付近、「萬里倉ノ高地及其溪谷」に駐屯しており、はるか離れた仁川港の情報が届きにくかったのかもしれない。

六月廿八日 晴天

当地ハ飲用水乏シクシテ井戸堀ウヅノ業ヲ助ク／午後中隊ノ馬匹一頭放走ニ探索ノ為メ東方ニ向テ出張全日帰營ス／此日酒一人二付一合ツ、（カン詰）三個ツ、分配。

二八日は木曜だが、全員に一合入り酒缶詰三個が分配された。昼の井戸堀りの作業が暑さで辛かったのか。水調達と屎尿処理は、本格的外征に従事した各部隊の悩みの種であつた。

六月廿九日 晴天

本朝永岡参謀長來營、第六中隊本日到着ノ筈ト於□ス、檢護ノ為メ將校兵卒若干名出張。／第六中隊ノ到着セシハ夜半ニシテ全隊兵卒ハ仁川上陸後直チニ出発トノ事ニテ其疲労甚敷、特ニ食事腐敗空腹其慘状見ルニ不忍。

二九日に永岡参謀長が、著者の第五中隊の営舎に現れ、野戦砲兵第五聯隊の第三大隊を構成するもう一つの中隊である第六中隊が本日到着予定、と伝えた。第二次輸送計画の諸部隊は、歩兵中隊若干が二八日に仁川港を出発し、多くの部隊は二九日に出発した（『日清戦史』第一卷一一五頁）から、第六中隊は後者の日程で移動し、疲労が甚だしかったと思われる。いづれにしろ二九日夜をもって、混成第九旅団の全てが朝鮮半島に上陸を終わり、しかも歩兵第二一聯隊第三大隊（一箇小隊と一個分隊は兵站線守備）と第二野戦病院を仁川に配置した他

は、漢城南西四<sup>キ</sup>ほどの龍山付近に集中していた。

六月三十日 晴天、午後三時ヨリ雨

午前六時ヨリ東方二里余ノ処ニ行軍、全十一時帰營、時ニ韓人我軍隊ノ整トシテ秩序正シキヲ見舌ヲ捲テ感スルノミ。／午後酒一合ツ、分配セラル。

野砲第五中隊は、二六日（火曜）、三〇日（土曜）と付近の行軍など訓練を続けていた。砲兵の行軍であるから、砲車を挽いて所定の場所に設置する訓練などを、朝鮮民衆に見せつけていたのだろう。七月一日は日曜のため訓練も休みとなった。

七月一日 雨

午前午後共休業。

仁川港に詰めていた清国海軍の五艦は、七月一日廣内がまず去り、鎮遠、濟遠、平遠、超勇の四艦も去って、逆に「或ハ大挙再来ノ徴ニ非サルカラ疑ハシメ」（第一卷一二四頁）る。暑さに「莫大風雨」も悩みの種だった。天幕にも雨漏れの強い雨で、朝の行軍も途中中止となる。この天候の中で「郷里ノ両親ヲ思フノ念交々換ル」という気持ちになっている。

七月二日 風雨

午前東方ニ行軍中莫大風雨ノ為メ帰營、天幕中雨溢甚タ困難、郷里ノ両親ヲ思フノ念交々換ル、此日正午大隊東方ノ高地ニ集合シ陛下ヨリ酒及煙草ヲ賜ハリタル旨ニ付陛下并ニ軍隊万歳ヲ三呼ス。／該品ハ不日到着ノ上分配ノ事。

前日行軍は中止となったが、七月三日（火曜）は舍營地より四<sup>キ</sup>の地

点で野外演習となった。この日から実戦を意識した演習となったが、雨が強く、翌四日は訓練中止となった。

七月三日 曇

午前七時ヨリ里余ノ処ニ野外演習ヲナス。／尚雨溢甚敷困難不尠。

七月四日 雨

午前降雨ノ為メ鍊兵休。

五日（木曜）の演習では、大砲を備え付ける「急造肩墻」の築造を行ったが、日記であるにも関わらず「但シ演習ノ為メ」と但し書きを記すのは、何のために出兵してきたのか、しだいに将校たちにも分からない状況が不安を呼んでいたのだろう。

七月五日 時々雨

午前七時ヨリ漢江沙漠ニ行軍、急造肩墻築造、但シ演習ノ為メ。五、六、七日と三日間連続で同じ場所での演習を続けている。八日（日）は休業だろうが、九日（月）の演習予定は降雨で中止となった。演習を続け、いつ開戦してもよい準備をしたが、開戦か否かは全く不透明で、将校や下士官らが「情報」を交換していつそう不安になっていた。六日、著者はその気分を「風説百来人心不穩」と率直に記している。

七月六日 晴天

午前七時呼集、漢江沙漠ニ於テ演習、正午帰營。／本日ヨリ冬衣ヲ廢シ夏袴ヲ用ヒラル。／未タ実戦有無ノ審明ナザルヨリ風説百来人心不穩。

七月七日 曇天



午前七時呼集、漢江ニ於テ演習、全十一時帰營。

七月八日 曇天

午後三時ヨリ風雨益盛ナリ。

九日（月曜）は「未曾有ノ大雨」のため、訓練中止となつたが、午後には晴れて「照準法」の訓練となつた。訓練はいよいよ実戦を想定したものとなつていった。

七月九日 曇、正午大雨、午後晴

午後<sup>ママ</sup>降雨ノ為メ鍊兵休止、正午未曾有ノ大雨。／午後晴ル、ヲ以テ照準法演習。

一〇日（火曜）は平日なので訓練があつたと思われるが、著者は記入せず、午後二〇分間の降雨と、おそらく夜に催された「将校宴会」と「軍楽隊奏奏」を記録している。軍楽隊（四七名）は第四師団の部隊で、七月六日龍山に到着した（『日清戦史』第一卷一一七頁）。

七月十日 晴天、午後三時十分ヨリ二十分間降雨

本日将校宴会、軍楽隊奏奏ス。

一一日（水曜）午前は訓練で、この日から米飯の増加が実施されたが、砂が多く混ざり、兵士たちは閉口して、不満となつた。この日は、清国軍の駐屯する牙山と、北方である開城方面への将校斥候が派出され、公使館から提供された各五名というのは通訳だろう。『日清戦史』では、混成旅団先発大隊の漢城到着時点と、旅団長の到着時点に、それぞれ将校斥候が、牙山と開城に派遣された（第一卷一一七頁）と記しているが、日には記載がない。「従軍日記」七月二一日の条により、それ以後の将校斥候派出が判明した。

七月十一日 晴天

午前鍊兵、此日ヨリ増食給与ヲ行ハル、然レトモ米ノ増給ニ付各兵甚タ不喜。／米質ノ不善ヨリ飯中ノ小砂多キニ閉口極ハル。／牙山ニ騎兵将校一下士二名兵卒七名、開城方行将校斥候一名、公使館ヨリハ双方へ五名ツ、出セリ。

七月一二日（木曜）は午前七時から呼集と訓練だったが、午後は休業している。翌日の競技会の準備等があつたのかもしれない。

七月十二日 晴天

午前七時呼集、午後休業。

七月一三日（金曜）は、早朝に呼集をかけ、午前七時から二時間競技会を開催した。著者の第六砲車は二等賞となり、砲車長、二番砲手の三人で五〇銭を提供して賞金の二円と合わせて「酒宴」を開いた。競技会でよい成績を収め、酒宴となつたのでご機嫌だった。

七月十三日 晴天

午前五時呼集、七時ヨリ第六中隊ト和合、砲車隊及段列隊各六門部ヲ編成シ競駄馬法、全九時終結、砲車隊ニテ受賞、砲第一等賞、第六二等賞、段列第六一等賞、第一二等賞、其賞金額一等賞二円、二等賞一円五十銭、我大隊長検閲満足ノ意ヲ示シ此力評ヲ下ス、而シテ余ハ第六砲車隊第六砲車ニ在リテ其賞ヲ受ケ我砲車長及二番砲手各金五十銭ヲ出シ賞金ト合シ酒宴ヲ開ク、愉快リ。一四日（土曜）も砲車に輸送段列（砲弾、火薬等）を付属させ、実戦に近い訓練であつた。

七月十四日 晴天

中隊ハ段列ヲ附シ難路通過行軍。

一五日は日曜なので訓練は休みだろう。軍楽隊本部での演奏を著者は聞きに行っている。

七月十五日 晴天

此日軍楽隊ハ団本部ニ於テ演奏、其声音絶佳ナリ。

一五日には海軍の全主力艦が佐世保軍港に集結を終わった。主力艦集結になぜ踏みきったのか。「清国ハ縦令開戦ニ至ルモ徹頭徹尾守勢ヲ取ラントスルノ情況アルヲ知シリシニ因リ」(第一卷一二四頁)、「軍港要港ノ警備ヲ風帆艦若クハ老弱ナル軍艦及水雷艇ニ任」(同)せられる、との判断だった。日本海軍も陸軍も、開戦に向けて万全の態勢を完成させつつあった。一八日には常備艦隊と西海艦隊を合同させて聯合艦隊(合計五万四五〇一噸、艦隊付属の傭汽船数含まず)とし、「戦鬪及航海ノ準備全ク成レリ」(二二五頁)。

一六日(月)午前は大隊の行軍予定を降雨で中止とし、止んだ午後は照準法の訓練を行った。「従軍日記」では初めて登場する銃後からの慰問品記述である。安芸の宮島神社と熊本に加藤清正の守護札や寄贈品が到着した。漢城居留民や公使館からも酒や牛肉の寄贈があり、いづれも兵士たちに同じように分配された。六月の出兵以来日本内地では好戦熱が高まり、義勇軍志願、慰問品・金の拠出などが頻繁に行われている。

七月十六日 晴天

午前大隊行軍予定ノ処降雨ノ為メ見合、午後午後照準砲／此日安芸宮島神社及ビ加藤清正公ノ守護札寄贈品到着、各人ニ分配。／

亦京城居留民一全及ヒ公使書記官等軍人慰勞ノ為メ酒一合ツ、及牛肉少量ツ、寄贈。／青色ノ毛布到着、各人一枚支給。

一七日(火曜)一砲車に駄馬四頭と砲手四名を配置し、二〇〇が先の山上に先に登るのを競ったが、著者は受賞せずで記載が穏やかである。この夜も軍楽隊の演奏が提供された。

七月十七日 晴天

午前駄馬四頭砲手四人ツ、ヲ以テ一砲車ヲ組織シ懸賞ニテ各砲車長ノ独権ヲ以テ距離二千米突余ノ山上ニ先登競争セシム、其受賞者第一第二第五砲車。／午後七時大隊本部前二軍楽隊演奏。

二箇中隊あわせての大隊行軍の予定は、第六中隊の準備が出来ず、第五中隊のみとなった。

七月十八日 晴天

午前六時呼集、大隊行軍予定ノ処第六中隊ノ都合ニ依中隊行軍ニ為ス。／前日ノ先登競争ノ賞与授与セラル。

一八日(水)は大本営が開戦へと踏み切る日となった。天津の神尾光臣中佐から、清国軍六營(約三〇〇〇人)が翌日出発予定、という電報が一八日午後三時四五分大本営に到着した。同日午後九時発の参謀総長発大島旅団長宛て電報は、聯合艦隊は二二日佐世保出航予定、清国軍の増派に「其軍艦運送船ヲ破碎」せよと命令、混成旅団も、清国軍増派情報を得れば「首力ヲ以テ眼前ノ敵ヲ撃破スベシ」と指示し、開戦へ大きく舵を切っている。

一八日午後九時発の参謀総長電報は、混成旅団司令部におそらく一九日中には到着しただろう。また一九日未明、漢城に帰任する大本営

参謀福島安正中佐が、龍山の旅団司令部を訪れ、「大本営ノ内意」として「清国将来若シ軍兵ヲ増発セハ独断事ヲ処スヘシ」と大島旅団長に伝えた。ここに旅団の独断による戦闘開始が許可されたことになる。「日清戦史」草案は、ここに至るまで「大本営ノ意図ハ本事变ノ最初ヨリ清国ニ対シ常ニ戰略上機先ヲ制セントシ名分ノ許ス限リハ主動者タルノ希望ヲ有」していたが、「内閣ハ之ニ反シ飽マテ被動ノ位置ニ立タント欲シタリ」という食い違いがあり、福島中佐の派遣による口頭伝達という手段になったのだ、と説明している（『第一篇第三章』第三章案）。

「従軍日記」によれば、一九日（木曜）に歩兵第二一聯隊第四中隊が、戦場となるべき牙山に向かつて出発した。斥候部隊であろう。この記載も『日清戦史』にはないが、『日清戦史』第三章案にはより詳しく記されている。

七月十九日 晴天

此日山口県有志者ヨリ寄贈シタル夏橙各人ニ三個ツ、給与、時節的尤モ佳評。／午前十一時朝鮮国ノ将官洪啓進来リ我幕営内ヲ見物ス、帰路歩兵隊ハ演習ヲナス、其規律動作尤モ整頓シ全將軍ノミナラズ我將校ニ至ル迄満足ノ意ヲ表ス。／此日支那公使ハ逃亡シ公使館ハ支那ノ国旗ヲ挙ケタルマ、行衛知レズ。／歩兵第廿一聯隊第四中隊ハ牙山ニ向テ出発セリト。

斥候部隊が派出されるなど戦争開始への予感が強まる一方だった。二〇日（金）の「従軍日記」には、舍営守備の厳しさから「実戦將二起ラントシ」ている、と感じ取っている。

一方で開戦理由に関わる朝鮮政府との外交交渉は進んでいなかった。旅団の戦争準備を見た大島公使は、大島旅団長に、朝鮮政府への軍事行動を促した。陸奥外相は、大島公使提案の、朝鮮王宮占領作戦を禁止しつつ、清国軍の増派は「兵力ヲ以テ我ニ向テ敵対シルモノト認定」し対抗手段を取るよう、一九日午後六時発で打電した。

二〇日午後一時、大島公使は大島旅団長に「マズ歩兵一箇大隊ヲ京城ニ入レ、コレヲ威嚇シ、ナオ我ガ意ヲ満足セシムルニ足ラザレバ、旅団ヲ進メテ王宮ヲ囲マレタシ」と提案した。同意した大島旅団長は、牙山南進を一時中止し、二三日早暁の景福宮攻撃作戦の遂行計画を進めた。「従軍日記」著者の、開戦予感にあたっていたのである。

七月二十日 雨

午前中隊ハ漢江ニ於テ演習ヲナス／午前六時恩賜ノ酒五勺ツ、ヲ分配ス。／此日午後降雨甚シキ天幕内ニ溢ル、雨水全身ヲ潤ス、而シテ実戦將二起ラントシ守備益厳然タリ。

七月二一日（土）は、以前に伝えられていた天皇からの「恩賜ノ煙草」が部隊に到着し、全員に配布された。同時に戦闘準備の入念な点検が命じられ、各人の背囊に「布囊」と「半紙二帖」を必ず納めておく指示があった。負傷した際の応急手当に使うためと考えられる。

七月廿一日 大風雨

此日兼而命令アリシ恩賜ノ煙草到達、各人ニ一包ツ、分配セラル、誠ニ天恩ノ厚キニ感涙スルノ外ナキナリ、此時ニ当リ戦闘既ニ起ラントシ出戦準備愈密、各人ノ背囊ヲ納メ布囊ヲ渡シ半紙二帖ハ必ス所持ス可キ旨命示セラレタリ。

二二日(日)午後三時に、翌日午前三時三〇分に呼集し、完全武装で「野外演習」実施、との命令が伝達された。「野外演習」と説明されても、完全武装だから実弾も配布されただろうし、数日来の戦争予感もあり、緊張は高まっていた。「日清戦史第三草案」は、

右ノ計画(引用者注：二三日に王宮占領を行う計画)ハ固ヨリ之ヲ秘密ニシテ二十二日ニ於テ之ヲ各隊ニ公達シタルニアラス、唯之ヲ各部隊長ノミニ訓示シ而シテ部隊ニ向テハ『二十三日未明ヨリ京城ヘ行軍ス』ト云フ公達ヲナシタルモノニシテ出発スヘキ各隊ハ既ニ二十二日晝ヨリ集合シ露営シテ期ノ至ルヲ待テリ。

と述べており、背囊等の準備を済ませた各隊は、同夜深更より行動を開始し、露営して出発を待っていた。二二日の各部隊長に下した訓令の「秘密会議」は同日午前に行われた。

七月廿二日 風雨

午後三時明二時三十分呼集ヲ以テ出師ノ武装ヲ以テ野外演習ヲ行フト示サル。

七月二三日(月曜)、時々雨、という悪い天候だったが、予定通り深夜の呼集があった。午前〇時三〇分、大鳥公使から旅団長に宛て「計画ノ通り実行セヨ」という電報が届く(「日清戦史第三草案」)。龍山付近に駐屯していた混成旅団のほとんど総力である、歩兵第一聯隊の二箇大隊、歩兵第二聯隊の二箇大隊、騎兵第五大隊の一箇中隊、砲兵第五聯隊の一箇大隊(著者の部隊)、工兵第五大隊の一箇中隊が、同時に漢城に侵入し、景福宮をめざした。旅団司令部は前線指揮のため、市内の日本公使館に移り、漢城電信局の電線を切断させた。壮士

ら民間人だろう。王宮攻撃が欧米や清国に早く伝わるのを阻止するためである。著者の部隊は午前三時四〇分、砲列を阿岷洞北方高地の山頂に敷き、照準を「王城ノ西門」に向けた。五〇分後の午前四時三〇分、大隊長から「実弾ヲ装填」命令が届き、その五分後、景福宮の北部地域から銃声が聞こえてきた。これは歩兵第二聯隊第七中隊等の攻撃である、と著者が判断しているのは、歩兵部隊のどれがどこを攻撃するのか、承知していたからだろう。「王宮ノ占領」は、歩兵第二聯隊の第二大隊と大隊本部、工兵一箇小隊だった。歩兵第二大隊は、釜山守備隊として第八中隊が抽出されており、実行部隊は第五、第六、第七中隊となる。「従軍日記」の記載は正しい。

午前六時四〇分には伝令が王宮占領を伝え、第三大隊長は、兵士らに、公使を攻撃する朝鮮軍を撃退する自衛行動である、と説明した。この論理は、参謀本部編『日清戦史』も同じであり、自衛行動と説明すること、という事前の指示があったことをも示している。実際は「従軍日記」著者が淡々と記しているように、日本軍の計画的な作戦行動だった。

七月廿三日 時々雨

午前二時起床、武装ヲ整ヘ野外演習ヲナス、三時四十分式番丁ニ至リ山頂ニ於テ砲列ヲ布ク、其照準点ハ王城ノ西門ナリシ。／時ニ大隊注意ヲ示シテ曰ク実弾ヲ装填ス可シト、時ニ四時三十分ナリ／午前四時三十五分王城ノ背部ニ於テ盛シニ銃声ヲ聞ク、之レ即チ歩兵第廿一聯隊第七中隊等ノ攻撃声ナリ。／午前六時四十分伝令来リ王城ハ我兵之レヲ占領ス、今ヨリ武器ヲ運搬スト報ス。



／大隊長各兵ニ示シテ曰ク今朝我公使ハ王城ニ至リ詰言スル処アラントセシニ韓兵ハ我ニ向テ発銃セリ、故ニ我公使護衛ノ歩兵隊ハ之レヲ撃退シタリ、我負傷者三名韓人未詳分捕品多シ。／余ハ曩ニ攻撃ノ際望遠鏡ヲ以テ望ムニ白煙起リ韓兵ノ山上ニ走り上リ逃ケ出ツルヲ認ム、時ニ一轟声アリ、是レ我兵力突貫シタル声ナリ、実ニ朝鮮人ノ無神経ニシテ愛国心ニ薄キ余等ヲシテ一驚ヲ喫セシム、彼レ敵ノ為メ武器ヲ奪ハレ之レカ運送ノ助力ヲナス、之レヲ以テ全国ノ独立ノ基本立難キノ一斑ヲ伺フニ足ル

翌二四日（火）午後、牙山での戦闘のため、二五日午前一〇時出発、戦闘準備、の命令が下された。いよいよ戦争という感情は大隊に満ち、天皇から下賜の酒で「別盃」の儀式も行う。牙山への砲兵隊は山砲編成で、第六中隊の六門と、第五中隊の二門（一箇小隊）である。著者の小隊は塩津鎮独立支隊（歩兵第二一聯隊第二大隊の二箇中隊、歩兵第二一聯隊の一箇中隊、騎兵第五大隊の一箇小隊、砲兵第五聯隊の一箇中隊、工兵第五大隊の一箇小隊、第一野戦病院の半部）として残留部隊となる。釜山、仁川兵站、龍山兵站、龍山舍營病院、京城の各防衛小部隊を置き、五、六〇〇名と想定される清国軍に対し、混成旅団主力は歩兵三〇〇〇名、騎兵四七騎、山砲八門で攻撃する計画である（第一巻一三〇頁）。

七月廿四日 晴天

午前四時中山少尉指揮シ武器ノ運送ヲナス、思フニ其武器ハ兼而清国ヨリ京城ニ運送シアルタル者ノ如シト。／午後命令第六中隊第五中隊第一小隊ヲ附シ都合八門ヲ牙山ニ向ケ明廿五日午前十時

出発ノ事、依テ兼而恩賜アリタル酒ヲ分配シ別盃ヲナス、我中隊長ハ大隊長ニ対シ我中隊ノ教儀ト名譽ヲ墮落セシメザルコトヲ誓ヒ併セテ隊長ノ武運長久ヲ祈ル可キ旨ヲ述ブ。

二五日（水）午前一〇時旅団主力は出発し、塩津鎮独立支隊は一戸兵衛歩兵第一一聯隊第一大隊長の指揮を受けることになった、と著者は記す。支隊主力の歩兵第二一聯隊第二大隊長は山口圭蔵少佐で、『日清戦史』の「塩津鎮独立支隊ハ山口歩兵少佐ノ指揮ニ属シ」（第一巻一二八頁）から考えて、この部分は著者の記憶違いだろう。塩津鎮独立支隊への命令は「北方ノ危機切迫スルニ方テハ塩津江畔ニ進ミ」（第一巻一二八頁）とあるので、平壤からの清国軍南下などの危機が迫るまで、漢城守備隊である歩兵第一一聯隊第一大隊（第三中隊欠）の大隊長一戸少佐の指揮下にある、という命令だったと思われる。

七月廿五日 晴天

前日命令ノ通り午前十時ヨリ第六中隊ニ第五中隊第一小隊ヲ附シ牙山ニ向テ前進。／本日命令ニ曰ク残留ノ者ハ歩兵第廿一聯隊一戸少佐ノ命令ヲ受ク可シ／但シ塩津港ニ向テ前進ノ筈。

残留部隊の砲兵第五聯隊第五中隊は、二六日（木曜）も漢城から北方に向け警戒しつつ行軍演習とした。この日、豊島沖付近での七月二五日海戦の様子が著者にも入り、聯合艦隊への大本営命令は、輸送船を「撃破ス可シ」だったと記録している。いわゆる「豊島沖海戦」は、大本営命令から考えても「豊島沖輸送船団襲撃戦」と名称変更するべきだろう。大本営が伊東佑亨聯合艦隊司令長官に命じた電文（七月二〇日佐世保軍港で受領）は、



二、清国更ニ兵員ヲ増加派遣スルニ至ラハ彼レ我ニ敵意ヲ表スルモノト認ム故ニ我艦隊ハ直チニ清国艦隊及運送船ヲ破壊スベシ。と明確に記していた（『日清戦史』第一卷一五九頁は「我ニ敵意ヲ表スルモノナルニ因リ極力之ヲ防止セシム」と表現を和らげている）。七月二五日午前八時頃始まった海戦は午後一時前まで続いた（第一卷一六一、一六四頁）。戦況を伝える電報を砲兵隊の一将校が記録しているのは、聯隊本部などから文章の形で伝達があつたからだと思われる。

七月廿六日 晴天

午前六時三十分呼集、京城ノ西北ニ向テ行軍、十時三十分帰宮。  
／我艦隊ハ廿二日佐世保ヲ出発シタリ、右ハ大本営ヨリ左ノ要領ノ命令ヲ受ク。

豊島附近ニ増加兵到着ノ模様アレハ之レヲ撃破ス可シ。／命令ニ我騎兵ハ多分本日ハ牙山店安附近ニ達セシナラン

電報廿五日午前九時廿五分発 仁川横田大尉発。牙山方行ニ砲声熾シナリ、多分開戦ナラン、木曾川丸監督将校ノ言フニ抛レハ我艦隊牙山ニ到着。

全十時三十分発 全 砲声五十分間ニシテ止ム、九時軍艦八重山武蔵大島出航ス。

全廿五日午後九時四十分 滝山発ノ電報

小田尾島遙カノ沖合ニテ遠雷ノ如キ音ヲ聞ク多ク砲声ナラン。

木曾川丸ハ八重山艦ヘ命令伝達ノ為メ至リ午後七時帰レリ、思フニ豊島附近ニテ戦ヒ支那艦牙山湾ヘ走逃セシナラン、伍俠島「シ

ヨバオール」附近ニテ軍艦高千穂カ支那運送船一艘ヲ沈メタルヲ見ル。

陸戦での成歎の戦い、海戦での豊島沖輸送船団襲撃戦も終わり、いよいよ朝鮮北方、平壤をめざしての戦闘計画が見えてくる。

### むすびにかえて

「従軍日誌」を基礎に『日清戦史』と「日清戦史」草案を含めて、日清戦争の復元、再検討を行ったが、成歎の戦いと豊島沖輸送船団襲撃戦で、紙数が尽きた。次号掲載を予定している。

（はらだ けいいち 歴史文化学科）

二〇一〇年十月六日受理